



震央分布図

2008年

2月 1日

〜

2月29日

マグニチュード

○ ≥ 5

○ ≥ 4

○ ≥ 3

○ ≥ 2

○ < 2

地震数

261回

気象庁・大学・
防災科学技術研
究所の資料を基
に作成

西南日本南方沖の南海トラフ沿いでは、約百年間隔で巨大地震が起っています。

今回は1944年の東南海地震とその2年後の南海地震の2つの巨大地震が発生しましたが、大阪・京都などの被害は軽微だったとされます。その前の1854年(安政年間)には、1日において東海地震と南海地震が続けて発生しました。このときは大阪の一部で震度6の揺れがあり、大阪湾を3mの津波が襲いました。

3回前の1707年宝永地震では、大阪平野全域でほぼ震度6相当の被害があり、大阪湾でも津波による大きな被害がありました。南海トラフ全域が活動し、東海、東南海、南海の3つの巨大地震が同時に起きた連動型超巨大地震と呼べるもので、太平洋岸はもち

ろん、近畿中部でも大きな被害をうけるようです。

東京大の都司嘉宣准教授によれば、大阪付近の被害の記録から推定すると、6回前の1361年(正平)の地震も連動型でした。「連動型の後、非連動型が2回続く」を繰り返したことになります。そうすると、今世紀半ばまでに起きるとされている次回の南海トラフの巨大地震は連動型の順番に当たります。

しかし、なぜこうなるか物理的な理由は不明で、偶然かもしれない、次回必ず連動すると断言はできません。ともあれ、昭和の南海地震は歴代で最も小さかったものとも考えられるので、次もあの程度と高をくくるのは危険です。

(片尾 浩・京大防災研地震予知研究センター准教授)

次は連動型超巨大地震?!